

Title	日本國家思想(肥後和男著, 弘文堂刊行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.181(521)- 182(522)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0182

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

洋學——近世後半に至つて漸く識者の認むる所となつた西洋近代思想學術——の研究は未だ未開拓であると言はれる。この事は洋學に含まれる所の諸學例へば醫學、天文學、兵學等の研究が未開拓であると云ふのではない。むしろそれは一定の飽和狀態をさえ感ぜしめるやうな精緻な研究に迄到達したものさえあるのである。

しかもなほ洋學が一定の規定をすら受け得ぬと云ふのは一に洋學研究には非常に多方面の知識を必要とし、且つその史料が甚だ廣く分散してゐる爲と思はれる。又更に我々を苦しめるものは洋學の基礎となつた外國語が和蘭語と云ふ現在一般的でない言語を通じたものである點で、これこそは洋學研究の一障壁として我々の前に横はるものである。

本書は著者が語學專攻の學者である所から正にこの障壁を美事に突破されたもので自分は本書を以て洋學研究史上に「エポック」を劃したものとして推稱したいのである。

自分は最近淺學にも拘らず洋學に關する一小著を公にする機會を有つて目下遲筆に鞭つてゐるが、これについて恩師幸田成友先生が自分に示されたのが本書であつた。自分は本書を手にして思はず先生の前をも憚らず感嘆の聲を擧げたのであつた。

こゝに書き出されてゐるのは「前野蘭化（良澤）」の傳記ではない。著者は言ふ。

「この小篇は黎明期に於ける我が蘭學の一斷面を前野蘭化なる人物に託して描寫せんとしたものである。それは我が夏の日の夢に構想してゐる日本蘭學史の第一章、或ひはその序説と看做

して戴いても差支へない」

氏の研究、敍述の態度はあらゆる先人の研究を涉獵し蘭學研究の集大成を企圖せらるゝものゝ如くであり、しかもその膨大なる資料を十二分に消化、驅使せられてゐる。

先づ蘭學の意義より説き起して前野蘭化に至る蘭學史を構成されてゐるが中にも長崎に於ける通詞の蘭學についてその語學の根柢を分析された事は蘭學研究者の一宿題を解いたものとして、又今後の洋學研究に一の鍵を與へたものとして重要であり、從來の名家の説にして覆つたものさえ見出される。

本論に入つては正に著者の卓越せる語學力によつてのみ獲らるべき燦然たる成果を收めて居られるが自分の冗文は最早これを紹介することを許されなくなつた。

終りに本書には前野良澤の未刊遺稿九種が附録として收められてゐることを喜び、この大著を犠牲的個人出版せられた著者の學界に對する貢獻の偉大なるを讃へて感謝の意を表する。（個人出版七〇一頁）（高橋慎一）

日本國家思想

（肥後和男著
弘文堂刊行）

これは此の度び發刊された教養文庫の一冊である。

我々は須臾も國家から離れることは出來ない。日本、ドイツ、イタリヤの力強き活動もすべて國家に立脚してゐる。世紀の祕密國家の門を開かなければ現代を理解することは出來ない。私は歴史學の立場から日本國家思想の時代的展開を試る。

著者はかう始められる。それから國家の生成を主として支那、朝鮮に例を假りながら敍し、更に國家思想の出現に及んでゐるのであるが、著者の特に強調せられるところは日本國家思想は根本に於ては變更せしめられなかつたといふ點であり、それが著者肥後和男氏の日本國家思想史の根本的な立場である。

本書は更に進んで統一國家の成立とその思想、佛教と國家思想、封建的國家の再現と國家思想、中世の神國論、近世の國家思想、明治以後の國家思想と頁を追つて手際よく述べられてゐる。

本書にはところどころ著者らしい民俗學的な見解も見えて興味深いものがある。例へば郷社の成立が河川の水利と深い關係を有すること、即ち一筋の河水によつて灌漑の便を得る村々が集つて郷社を支持してゐる事實から古代に於る農業集團の結合が水利を機縁として行はれたであらうこと想到せられた如きその一例である。

本書はその名の示す通り、國民的教養を目指してゐるのであつて、公平なる見解を平易なる敍述を以てなせるもの、精密なる考證、斬新なる一家言を期待すべきではないのは勿論である。(四六新判本文一七一页、定價五拾錢)(淺子勝二郎)

ではまだ太陰曆のつかはれて居た時代のことである。

そしてこのことは新元會或はオランダ正月などと呼ばれて居たのであるが、本書の題名「おらんだ正月」の出所もまたこゝに存して居るといふ。本書は傍題として「日本の科學者達」といふ説明が附してある通り、日本——といつても特に徳川三百年の泰平の世に輩出して、後世に立派な業績を残した科學者等五十二人の小傳を記したもので、さうした人々を一書のうちに集めたおもむきが、恰もその昔オランダ正月を祝ひに集つた學者等の會合に似通ふからと云ふわけである。

しかし茲に本書を紹介するに當つて、豫め断つておかねばならぬことは、之がもとより兒童のための讀物として書かれたものだといふ點である。即ち本書は富山房百科文庫の一冊で、殊に家庭及兒童讀物の部類に含まれるものなのである。従つて之にも新しい研究の成果を求めたり、精細なる記述を期待したりするならば、それは始めて間違ひだと云はねばなるまい。それどころかこゝに見るのは一人あたりほんの五六頁ばかりの略傳に過ぎぬ、けれどもその平易にして且つ興味多く記されたうちに、讀者はなほ著者の周到なる用意を見ることが出來よう。各篇はもちろん個々に獨立するものではあるが、而もその間の連闊にも充分の注意がはらはれて居るし、その多くの圖版を載せて居ること、並びに各人毎にそれぞれ數種の参考文獻を示してあることなども非常に宜い。そして更に特別一言したいと思ふのは、そこにとりあげられた人々の多くが、いづれも時代に先がけた人々の姿であることである。學者等の仕事といふものは、いつの時代にあつても、と

おらんだ正月 (森銑三著)

徳川時代蘭學が漸く擴まり始めて、わが國にも次第に西洋の諸學が入り來つた頃のこと、さうした學問を修めて居る人々の間で太陽曆の新年を祝ふことが行はれた。云ふまでもなく、當時國內